社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2006年2月号

[6-7面]

【受験生特集】― さまざまな専大ライフをご紹介します。

学びの成果を学外に発信-(1)

神奈川産学チャレンジプログラム――3組が努力賞

(社)神奈川経済同友会主催の「第2回神奈川産学チャレンジプログラム」で3組の学生が努力賞に選ばれた。16社の会員企業が提示した経営課題に県内12大学から107チームが参加(本学からは18チーム)、若者らしいアイデアを提案した。

失敗経験がヤル気に

大江由夏さん 岡沙織さん 大塚由佳子さん 大乗美沙さん 津田和美さん (以上商3)

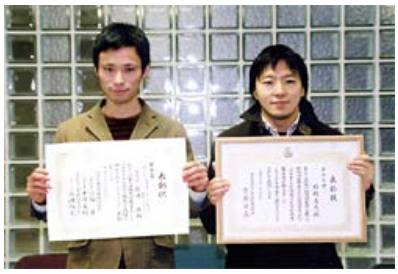
神原理ゼミの5人は「崎陽軒のイメージアップ戦略」をテーマに選び、「まずはイメージ調査を」と185人にアンケートを試みた。マーケティングリサーチの授業で分析方法は「分かっているつもり」だった。しかし、他大生を交えた発表で、「設問設定が間違っている」と批判され、そこから俄然「ヤル気」に。

根本から作り直し、夏期休暇中に2回目を実施。フィールドワークも行い、「移動販売車」「スイーツカフェ」を提案した。同社100周年(08年)に向け、「新キャラクターに犬(きようけんにからめて)を採用しては」というプランはプレゼンでとても喜ばれたという。「パワーポイントの故障といったアクシデントもありましたが、自分たちらしく楽しいプレゼンを、という目標が達成でき、私たちのやり方が認めてもらえてうれしい」とメンバーは話している。

ふだんの授業でもフィールドワークを行い「消費者の気持ちになって」考えることを同ゼミでは学んでいるという。

4年間学んだ総決算に

石橋豊史さん 岩井基さん (以上ネット情報4)



京浜急行電鉄の課題「鉄道系ICカードを利用した新規ビジネス」に取り組んだ。ベンチャーに興味があり、2年前には「専大ベンチャービジネスコンテスト」で佳作をとった岩井さんが、卒業制作でICカードを使った研究を、と考えていた石橋さんに声をかけ参加を決めたという。

旅客収入が減少する中、新たに収益を上げるビジネスモデルを模索している同社に、「電車内の液晶モニターに商品の広告を流す→購入したい乗客が携帯にダウンロード↓決済も携帯で行う」という「電車内で買い物ができる」システムを提案した。学部で鍛えられた2人は、企業人の前でのプレゼンも「特に緊張はしなかった」と笑う。

「3年次まではレポートなどでキツかったが、4年次では自由度が広がり、興味ある研究ができました」と話す石橋さんは、卒業後はネットワークエンジニアに。故郷の食品メーカーに就職する岩井さんは「先生方と距離が近く、何でも相談できました」と学生生活を振り返った。

「物語の想像」を意識

松本明子さん(経営4) 石田伶佳さん(同3) 青木沙紀さん(同) 笹目光子さん(同)

「消費者行動論」の新井範子ゼミは全員が参加。「テーマが面白そう」と東京ガスの新商品「MISTYによる新しい入浴文化のプロモー

ション」に手をあげた4人は、新井教授が常に口にしている「その商品を手にとる消費者の物語を想像してみること」を意識した。

当初は年代別のプロモーションを考えたが、ショールームで実際にミストサウナを体験し、「肌がスベスベになった」ことから、「神奈川在住の20代OL」にしぼり、その行動パターンを物語風にまとめ、「面白く、心をつかむ」プレゼンをすることに決めた。「フリーペーパーを作ろう」と提案したのは、デザインが得意な4年次生の松本さん。

プレゼンでは「美容やオシャレに敏感な、女性向け」といった視点が「想定していなかったターゲット層で、新鮮な驚きを感じた」と審査員から講評をいただいたという。

これから就職活動に臨む3人は、「今回の経験と、『想像力が豊か』と評価していただいたことを、自分の強みとしてPRします」と話している。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版
2006年2月号
[6-7面]

【受験生特集】― さまざまな専大ライフをご紹介します。
学びの成果を学外に発信-(2)

ネットワーク情報学部

5組が学部長賞表彰

学内外のコンテストなどにおいて、顕著な成績を収めたネットワーク情報学部の学生に1月24日、学部長表彰が行われた。齋藤雄志学部長から一人ひとりに表彰状が手渡され、表彰者は「大変なこともあったが、頑張れば結果が出る」と後輩にメッセージを伝えた。

ネットワーク情報学部学部長賞の受賞者たち

表彰者は次のとおり(カッコ内は学年、敬称略)。

▼荒木博志(4)、倉品裕多(3)、中村哲也(3)＝ACM国際大学プログラミングコンテスト台湾大会7位入賞

▼堤由惟(3)「ソーシャルネットワーキング型音楽配 信システム『beeMusic Bowl』」＝かわさき起業家オーディション学生部門学生グランプリ賞

▼飯田プロジェクト＝飛行船ロボットコンテスト【モデル審査部門】エクセレントモデリング賞(最優秀賞)

▼小林隆プロジェクト・代表・齋藤伸吾(3)「3E(Everytime Everywhere and Easy)Musicサーチ～音楽コンテンツの次世代検索手法～」＝専大ベンチャービジネスコンテスト鳳賞

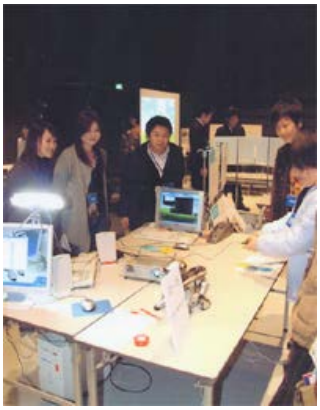
▼石橋豊史・岩井基(4)「鉄道系ICカードを利用した新規ビジネスについて」＝神奈川産学チャレンジプログラム努力賞

ベストプロジェクト賞表彰も

1月号既報のプロジェクト発表会において来場者の投票により、ベストプロジェクト賞に選ばれた3組に対しても同日、齋藤学部長から表彰状が渡された。

コウサ展

ネットワーク情報学部生有志による研究成果の展示会「コウサ展」が2月4、5日、日本科学未来館で開かれた。写真は、Webカメラを用いたリアルタイムな動画処理でAIBOを動かす参加者と石原秀男研究室の学生。



Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2006年2月号

[6-7面]

【受験生特集】― さまざまな専大ライフをご紹介します。

学びの成果を学外に発信-(3)

板坂則子ゼミ

韓国大田大学とネット共同授業

文学部・板坂則子ゼミ(日本文学文化専攻)と韓国の大田大学日語日文学科との間で共同授業が、11月29日に行われた。

生田キャンパスと大田キャンパスがネットワークで結ばれ、参加した60人の両大学の学生たちは、リアルタイムで日・韓両国のヒーローとヒロイン像について活発に意見を出し合った。

指導に当たった関丙勳・大田大学日語日文学科長は「このようなネット共同授業は初の体験で学生たちは今まで培ってきたIT学習を土台に、準備を進めてきました。日本語の学習や異文化体験に役立ち、こういった機会がもっと増えることを願っています」と話していた。

共同授業で質問する大田大学生たち(上は画面に映る両大学の様子)

※左下「活躍する卒業生」に関丙勳学科長を紹介

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版
2006年2月号
[6-7面]

【受験生特集】― さまざまな専大ライフをご紹介します。

サークル・課外活動-(1)

サークル活動でキャンパスライフに広がりを！ 体育会43部2同好会のほか、文化系サークルなど、専大は合わせて200以上のサークルがあります（詳細は冊子「キャンパスライフ」、ホームページで）。

グリークラブ

グリークラブの第41回定期演奏会が12月17日に行われ「月光とピエロ」（作詞・堀口大学、作曲・清水脩）をメーンとした美しい歌声を披露した。同クラブは年数回の発表の場に向けて、練習に励む男声合唱団で、昨年は多摩区合唱連盟「コーラスの集い」のステージにも上がった＝写真。清水雄介代表（文3）は「大学に入って初めて取り組んだ団員も多く、未経験者でも大歓迎です」と話した。

吹奏楽研究会

吹奏楽研究会の部員は約50人。昨年の定期演奏会はウエストサイドストーリーを中心とした「ポップスステージ」、スターウォーズ特集の「ドリルステージ」で500人の観客を魅了した。宿河原小学校での管楽器指導や地元商店街でのパレードなど、地域との交流も活発だ。2月から新代表となった稲妻亜紀さん（文3）は「初心者も丁寧に指導しますので、ぜひ入部を」と話している。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版
2006年2月号
[6-7面]

【受験生特集】― さまざまな専大ライフをご紹介します。

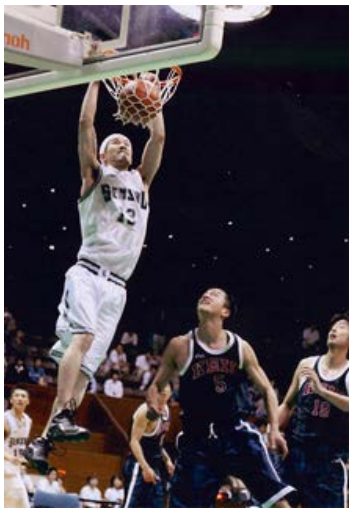
サークル・課外活動-(2)

準硬式野球部

05年東都大学秋季リーグ戦で優勝。マウンド上で胴上げを行い、全員で喜びを爆発させた。

バスケットボール部

男子大学チームとしては18年ぶりに全日本総合選手権「ベスト8」入りを果たした専大バスケ部。その中心として活躍した大宮宏正（経済4・作新学院高）はスーパーリーグの誘いを断り、NBA入りを目指して渡米する。



専大スポーツ編集部

「専スポ」は全ての部活を応援しています。興味がある人はHPを。部室にも気軽に来てください。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2006年2月号

[6-7面]

【受験生特集】― さまざまな専大ライフをご紹介します。

サークル・課外活動-(3)

部活拝見 サッカー部

朝練積み重ねて 念願の1部昇格

去年、念願の関東リーグ1部初昇格を果たし波に乗っているサッカー部。1962年に同好会として創立され、翌年、東京都大学蹴球連盟に加盟、関東リーグ7部から活動を開始し現在に至る。天皇杯にも、2度出場した経験を持つ。部員はマネージャーを含め約100人。入部の際にはセレクション(実技テスト)を行い、レベルの底上げに努めている。全国高校サッカー選手権の出場選手もどんどん入部しているが、スポーツ推薦だけでなく、一般入学の学生も若干名ではあるが入部可能だ。

2月5日、神田キャンパスで開かれた1部昇格祝賀会

多数の部員を束ねることになる池田末廣新主将(商3・清水商業高)は「高校サッカーと違い、一年間を通じてリーグ戦を戦っていくので一試合、一試合の積み重ねが重要」と語る。練習は毎早朝、生田キャンパス北グラウンドで行われる。この朝練という限られた時間のみでボールを使った練習や戦術の組み立てなどが行われる。そのため個々のレベルアップには総合体育館での筋トレやトラックを使った走り込みなど、ボールを使わない自主練が欠かせない。サッカーが好きだからこそ、ボールを蹴れるチャンスがある限り文句を言わない。そうして培われた伝統が、1部昇格という形になって報われた。これまで乗り越えられなかった1部と2部の壁を越え、ついに新たなステージへと駆け上がった。

リーグ最終戦―チームを引っ張る池田新主将

「いろいろな地域出身の人たちと一緒にプレーができるのはとても楽しい」と池田主将。1部優勝を新たな目標に掲げた彼らと一緒にピッチを駆け抜ければ、かけがえのない時間を過ごすことが出来るだろう。

キッズサッカーを指導

(澤田 和輝・法2)

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2006年2月号

[6-7面]

【受験生特集】― さまざまな専大ライフをご紹介します。

羽ばたく卒業生

国内外でいきいきと活躍する卒業生に、学生時代の思い出、現在の仕事について聞いた。

目的は「人命救助」 日本にも広めたい

ライフセービング世界選手権大会日本代表 中曽根麻世さん（平17経営）

競技中の中曽根さん（円内も）

2月14日から豪メルボルンでのライフセービング世界選手権大会の日本代表。本学のサーフライフセービング愛好会出身者の代表入りは4人目で、女子では初の快挙だ。

大会を控えた12月は、千葉県の稲毛海岸からゴールドコーストにトレーニング場所を移して練習を積み、得意のアイアンウーマンレースでの上位入賞を目指す。

高校時代（千葉県成田高校）は、競泳の個人メドレーの選手で、関東大会に出場。専大入学時に「水泳を生かせるかな」と軽い気持ちで同愛好会に入部。始めてみると「すごく面白くて」。スイマーは個人プレーだが、ライフセーバーは人の命を救うためにある。「そこに大きな魅力を感じました」。

海水浴シーズンは、外房の片貝海岸で水難防止の監視活動に励んだ。在学中、同海岸での水難事故ゼロを誇る。

全日本学生選手権などの大会にも出場。卒業を前に豪でのインターナショナル・サーフチャレンジU－22（国別対抗の団体戦）の日本チームの一員に選ばれ、初の国際大会出場となったが、結果は惨敗。「日本のレベルを思い知らされました」。

卒業後、玩具メーカーに就職したものの、「とことん打ち込もう」と3カ月で退職。昨年の全日本種目別選手権大会ではアイアンウーマンレースで優勝。全日本選手権大会ではパドルボートレースとアイアンウーマンの両種目を制覇し、世界大会の切符を手に入れた。

究極の目的は「勝利」ではない。「オーストラリアはライフセーバーが職業として存在しているのに、日本はボランティアの力に頼っている。人命救助としてのライフセービングを、もっと日本で広めたい。それが私の役目と思っています」。

日に焼けたあどけなさが残る表情が、きりりと引き締まった。

恩師に“夢”育まれ 「米大陸」に賭ける

在グアテマラ日本大使館・専門調査員 大澤武志さん（平16院経済修）

グアテマラのサンティアゴ・サカテペケス市で幸子夫人と

1996年にスタートした経済学部国際経済学科。卒業生は、さまざまな分野に羽ばたいている。特にラテンアメリカをフィールドにする狐崎知己教授のゼミからは、国際協力、NGO、中・長期ボランティアなどで、海を越えて活躍する卒業生が少なくない。

同学科の一期生であり、そういった卒業生のパイオニア的存在。大学院に進学し北・中米経済を中心に研究。一昨年から中米グアテマラで、在外公館専門調査員として働く。中米の政治、経済に関する調査、研究に多忙な日々を送っている。

「入学当初は授業よりバイトに明け暮れました」と苦笑する。他言語を身につけたいと千葉県磯辺高校から専大に。しかし入学前のイメージとは違って、大学はごく平凡に見えた。踏み出そうにも、どの方向に向かえばよいのか分からない。キャンパスからも同級生からも遠のき、退学寸前に追い込まれた。

「このまま終わりたくない」。将来に不安を抱え、苦しんでいた時に、示唆を与え、導いてくれたのが狐崎教授だった。グアテマラなど中南米地域研究のエキスパートの業績や知見に触れ「中南米を知ろう」と夢中で走り始めた。

3年次を終え、休学してイベロアメリカーナ大学（メキシコ）に1年間留学。国際NGOのプロジェクトに入り込み、グアテマラの先住民族の子供たちに算数を教えたことも。修士課程では再び同大学へ長期留学し、FTA（自由貿易協定）先進国と言われたメキシコの自動車産業を中心に研究。現地の専門家に質問をぶつけた。

温かく見守ってきた狐崎教授は「粘り強く抜群の行動力を持つ。向上心が強い」と評する。追いかけてきた恩師のフィールドに立ったいま、「将来はメキシコ、グアテマラでの体験を基に、北・中米の地域統合への知識を深め、日本経済との橋渡しをしたい」と意欲を燃やす。

日本古典の美意識を 韓国の若者に伝える

韓国・大田大学日語日文学学科長 閔丙勳（ミン・ビョンフン）さん（平13院文博）

大田大学の研究室で

専大文学部2年次の時、中田武司教授（現名誉教授）の授業で『源氏物語』の「もののあはれ」に接した。千年も前の文学であるにもかかわらず、時空を超越した物語の永遠性に感嘆。と同時に「日本はなんと奥深い美意識を持つ国なのだろう」と感じ入った。

それまで、芥川龍之介、森鴎外などの近代文学に傾倒していたが、たちまち古典の世界に引き込まれ、学者への道を決意。国費留学生となった大学院では、尊敬する中田教授に師事、文学の研究に没頭した。博士論文は『源氏物語』の紫式部にも影響を与えた平安前期の代表的歌物語『伊勢物語』について、豊かな感性で論じてみせた。

ソウルの大学に在学していたが、可能性を求めて留学を決意、来日したのが20代半ば。専大で9年、日本滞在11年は「3年間だったのでは」と思えるほど短く、充実したものだった。日本語聞き取りのハンデを、常に一番前の席で講義に臨み、一言一句聞き漏らすまいという強い意志で克服。厳しい中田教授の下で多くの発表の機会に恵まれ、鍛えられたことが後の研究のための糧となった。

「過程がよければ、結果はついてくる」のモットーどおり、帰国後、就職難の韓国ですぐに教員の職を得た。開学26年になる大田大学（韓国中部地区）の教壇に立つ。現在、日語日文学科の学科長として、日本語と古典から現代までの日本文学を教えている。日本の古代歴史にも多大な興味をもち、昨年は歴史関連書物を著した。最近は、分かりやすい韓国語版『源氏物語』の出版を計画している。

近くて遠いと言われる韓・日の若者たちには「いたずらに偏見を持たぬこと。ありのままの歴史を知り、古代からの両国のつながりを理解してほしい」と期待する。

周囲の一致した人物評は「物事に真摯に打ち込み、人に優しい人」。

大田大学と母校専修大学との、形になった文化交流を望む。

新宿コリアンタウンで働く人々の手助けを

総合コンサルタント事務所開業の公認会計士 車龍和さん（平13商）

新宿の事務所で

韓国料理店がひしめく東京・新宿の職安通り「コリアンタウン」近くのマンションに、昨秋、事務所を構えた。日本でビジネスを始めようと訪れた韓国人ニュー・カマーのための総合コンサルタント事務所を開業。税務、会計業務に加え、許認可申請、ビザの申請などの法務相談のほか融資の相談も受ける。

商学部4年次で公認会計士第二次試験に合格した。現役合格は両親にも約束した「絶対になし遂げる」目標で、体育祭実行委員などの課外活動に参加しながら、受験勉強中心の学生生活を送った。初めて受験した3年次で「短答式」を突破したことが自信となり、次の年の合格につながった。

「会計の知識は専門学校で学びましたが、会計業務でのアカウンティング・マインドは、商学部の先生方から学びました。それが後にクライアントと接する時の指針になりました」。

卒業後、中央青山監査法人に勤務。ある時、自宅に近いJR新大久保駅周辺の「コリアンタウン」で働く人

たちを間近に見て、琴線に触れるものがあった。「言葉や文化に慣れず、異国で生きているこの人たちの手助けができたら」。

同監査法人を退職し、興した事務所は「K＆Jコンサルティング公認会計士事務所」。名刺の「車龍和」には「くるま・たつかず」と「チャ・ヨンファ」の二つのルビが振られている。愛知県江南市出身の在日韓国人3世。日本語と日本の文化の中で育ったが、子供のころから民族学校で学んだ韓国語が身についている。それが、新ビジネスでの大きな武器になっている。スタッフはもう一人婚約者の韓国人女性だ。

「ビジネスサポートと言えば聞こえがいいですが、今のところ電話一本でかけつける“何でも屋”です。将来はサポートしている会社を大きく育て、上場できるまでにしたい。地域の発展に少しでも寄与できたら」と、夢が膨らむ。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.